『讃岐典侍日記』における表現―「推し量るべし」を中心に―

岸　千里

一、はじめに―『讃岐典侍日記』について―

『讃岐典侍日記』の作者は堀河帝に仕えた女房である藤原顕綱女、藤原長子であるとされている。（以下長子と表記する。）成立年の詳細は諸説あるが、作品中の時代は康和二年頃（一一〇〇年）から天仁元年十一月（一一〇九年）頃だと考えられる。本文については中間逸脱説や散佚説が挙げられているが現在は上下二巻構成とであるとの見方が主立っている。上巻は「序」と呼ばれている部分と、堀河帝が発病し亡くなるまでの「看取りの記」と呼ばれるものとなっている。下巻は鳥羽帝への出仕のため宮中に再出仕するが、懐かしさから堀河帝と過ごした日々を回想していく記となっており、最後は「跋文」と呼ばれる叙述で締めくくられている。

『讃岐典侍日記』は作品名に日記とついている一方、玉井幸助氏[注一]、中野幸一氏[注二]などは『讃岐典侍日記』には読者意識が見られるとの考えを示している。また『讃岐典侍日記』だけでなく、平安朝の日記文学における読者意識の指摘は青木生子氏[注三]などが『土佐日記』や『蜻蛉日記』にもみられることを明らかにしており、今井卓爾氏は、「どういう機会かに作者の手許をはなれたものが、転転と伝写されて流布していく写本時代の作品になると、作者は人によまれることを考えていたのかどうかが非常に疑問になってくる。そこに作者の読者意識の問題があらためて検討されなければならない原因がある。[注四]」としている。

本稿では、『讃岐典侍日記』中にみられる「推し量るべし」という表現が読者意識とどのような関わりがあるのか、先行研究をふまえ考察する。

二、『讃岐典侍日記』の「推し量るべし」

『讃岐典侍日記』にある「推し量るべし」は全部で三例あ

る。(注五)

①　かく苦しうおぼしめしたれば、大殿油、例よりも近くまゐらせなどする程に、ただ消えに消え入らせ給ひぬ。「あないみじ」と泣き合ひて、内大臣・関白殿参りて、つとさぶらはせ給ふ。おほかたののしり合ひたり。増誉僧正・頼基律師・増賢律師など召しにやりつ。頼基律師、すなはち参りて、経読み、仏口説きまゐらせらるる程に、暫しばかりありて、うち身じろぎせさせ給ふに、今少しののしり合ひぬ。経読まるるを聞かせ給ひて、「今は益あらじ。ただ駆り移せよ」と仰せられ出でたれば、もの憑く者など召して、率て参り、移さるるおびただしさは推し量るべし。

②　「あないみじ。かくてはかなくならせ給ひなむゆゆしさこそ。ありがたく仕うまつりよかりつる御心のめでたさ」など、思ひ続けられて、目も心に適ふものなりければ、つゆも寝られず、まもりまゐらせて、程さへ堪へ難く暑き頃にて、御障子と臥させ給へるとに詰められて、寄り添ひまゐらせて、寝入らせ給へる御顔をまもらへまゐらせて、泣くよりほかのことぞなき。「いとかう何しに馴れ仕うまつりけむ」とくやしくおぼゆ。参りし夜よりけふまでのこと思ひ続くる心地、ただ、推し量るべし。

③　人ども、見騒ぎ、いみじく心殊に思ひ合ひたるけしきどもにて、見騒げども、われは、何ごとにも目も立たずのみおぼえて、南の方を見れば、例の八河鳥・見も知らぬものども大頭など立てわたしたる、見るも、夢の心地ぞする。かやうのことは、世継ぎなど見るにも、そのこと書かれたる所は、いかにぞやおぼえて、引きこそ返へされしか。現にけざけざと見る心地、ただ推し量るべし。

①は上巻三節（嘉承二年　七月六日条）のことで、堀河帝の苦しむ姿を見た内大臣と関白が僧たちを呼び祈祷させるが、堀河帝は自分に憑いている物の怪を移させるという場面である。この時「推し量るべし」は物の怪がよりましに移される様子を見た長子が、移される様子が甚だしいことに対して「推し量るべし」を用いている。

②は上巻三節（嘉承二年七月六日〜七日条）のことで、堀河帝が自身の容態が悪いことを嘆く様子をみた長子が自分は無力であると悲しみ、堀河帝の具合が悪くなってから参上した時から今までのことを思い出す自身の心情に対して「推し量るべし」を用いている。

③は長子が大極殿の夜明けにいるときに回想した内容となっている。昔、内裏に参上した時に八咫烏や見知らぬ物が置い

てある光景を見るのは夢のような心地がしたと、そのときの心情に対して用いている。

①は状況・様子に対しての投げかけに対し、②・③は長子がそのときに抱いた心情に対して用いられている。

これらの表出について、今井卓爾氏は、

数回にわたって読者の推測にまかせている。その内容は状況のすさまじさ、自分の気持、悲しさ、気持、大嘗会の行事などであって、私の心情を察してほしいという訴えにも似たものが多く、後は顕著な実態についてである。こうまでしばしば言っているのは、自分が書くよりも想像に任せた方がよりよいと考えたからであり、筆舌につくしえないほど深刻で、書くにたえないこともあろうし、また、ある程度想像してもらえることは、想像にまかせておいた方がよいという判断もあったであろう。いずれにしても、この日記は明白に読者を意識して執筆したものであることがわかり、それだけに作者はある程度の筆加減をしているだろうということも含んでおかなければならないのである。(注六)

と指摘している。

今井氏の指摘通り、「推し量るべし」はそのときの場面や心情について詳細な記述が見られないことから読者意識があったと考えられる。また、大嘗会について、『讃岐典侍日記』の本文には「大嘗会のこと、書かずとも思いやるべし。みな人、知りたることなれば、細かに書かず。」となっている。従って、長子は周知の事実についてはわざわざ記述しないという表出をしたことになる。『讃岐典侍日記』には他にも省筆ととれる表現がいくつか見られることから、すべてを詳細にする記録的なものとして日記を書いたとは考えがたい。先ほど挙げた本文の①のように状況に対して用いられる場合は、詳細にしなくとも共通認識として各自が持ち得ているものに投げかけているようにみえる。もちろんよりましが移される様子が書くに憚られるくらいひどいものであったという解釈もできよう。よって「推し量るべし」も読み手の想像に任せると同様に考えることが出来ることとなる。

しかし、長子が不特定多数の読者を望む、または想定して筆加減をしていたかという点に関しては考察が必要である。

この①〜③で挙げた「推し量るべし」という表現について、注釈などが用いている訳および注は次の通りである。

玉井幸助『讃岐典侍日記通釈』(育英書院　昭和十一年)
③筆に記すことができない、読者の想像にまつの意。

石井文夫『讃岐典侍日記古典全集』(小学館　昭和四十六年)
①推し量ってほしい
②ぜひ推し量ってほしい
③ぜひ推し量ってほしい

森本元子『讃岐典侍日記全訳注』（講談社　昭和五十二年）
①どうか察してほしい
②どうか察してほしい
③ただ推察してほしい

今井卓爾『讃岐典侍日記譯注と評論』（早稲田大学出版　昭和六十一年）
①想像してほしい
②もっぱら推察してほしい
③ぜひ推察してほしいと思います

小野谷純一『讃岐典侍日記全評釈』（風間書房　昭和六十三年）
①推し量ってほしい・読者に語りかける態のことばとなっている。（中略）いわゆる読者意識として公開性に関わると捉えてよかろう。
②ただもう推し量ってほしい・触れたように、読者に向かっての語りかけの言。
③ただ推し量ってほしい

鎌田廣夫ほか『讃岐典侍日記本文と索引』（おうふう　平成十年）
①何人かの読者を想定している表現か。

岩佐美代子『讃岐典侍日記注釈』（笠間書院　平成二十四年）
①まぁ想像してみてほしい
②ただ推測してほしい
③ただ想像してほしい

小谷野純一『原文・現代語訳シリーズ　讃岐典侍日記』（笠間書院　平成二十七年）
①読み手への呼びかけの体だが、いわゆる読者と見るのは早計といってよい。ここは一般読者というより、内なるそれへの眼差し。
②ここでも、内なる読者に向かっての呼びかけが示されている。
③ここも、上文に見られた、推し量って欲しいとする、読み手に語りかける体の語句になっている。

このように玉井氏の注釈を除いた現存する全ての注釈及び現代語訳は「推し量るべし」の訳を「～ほしい」としている。玉井氏が「推し量るべし」を読者の想像に任せるという論に賛同したい。しかし、本来助動詞「べし」は願望や希望の意味を持たない。先ほど挙げた今井氏の見解も「推し量るべし」は長子が読者に対して用いたものなので「推量してほしい」と解釈をしていた。

本来「べし」とは『日本国語大辞典』に拠れば、

活用は形容詞ク活用型。活用語の終止形。（ラ変型活用は連体形）に接続し、当然そうあるはずだとか、必然的にそうでなければならないといった、確信のある推量を示すほか、文脈によって、状況として適当である意や、可能である意を示すことになったり、対人的にそうしなければならないという義務、ひいては、勧誘や命令の意を示すことにもなり、また、自分の取ろうとする行為に（注七）ついては、意志や決意を示すことにもなる。

とあり、各注釈書などがしている「～ほしい」という希望や願望の意味は含まれていない。諸氏が「推し量るべし」を「推し量ってほしい」としたのは、長子の主張を汲んでのことだろう。本来であるなら「推し量ることができる」という可能としての意味や「（読み手は）推し量るだろう」という推量、そして「推し量るはずだ」という適当などの意味が当てはまるだろう。自分が見た様子の甚だしさや自身の心情を「推し量ろう」という意志は不適当となる。

玉井氏、鎌田氏、小谷野氏は今井氏同様、日記中の「推し量るべし」は作者が読者に対して用いているとの見解を示している。これは多くを書かずともその状況ないしは心情を想像するのは難くないという相手を意識した言葉であろう。小谷野氏は全評釈においては読者意識があるとの見解であったが、原文・現代語訳シリーズでは、「読み手への呼びかけ」としつつも、読み手は一般読者ではなく長子自身としている。

三、他作品における「推し量るべし」

平安時代に書かれたとされる日記文学作品には、「推し量るべし」が使われているものは一例もみられなかった。しかし「おしはかる」については『蜻蛉日記』と『紫式部日記』に見ることができた。

『蜻蛉日記』上巻　十五

月夜のころ、よからぬ物語して、あはれなるさまのことども語らひてもありしころ思ひ出でられて、ものしければ、かくいはる。

曇り夜の月とわが身のゆくすゑのおぼつかなさはいづれまされり

返りごと、たはぶれのやうに、

おしはかる月は西へぞゆくさきはわれのみこそは知るべかりけれ

道綱母とその夫である藤原兼家が歌のやりとりをしている場面である。「おしはかる」は兼家が道綱母に対して返した歌に用いられている。月が東から西に移りゆくように、あなた（道綱母）の行く先である将来も決まっているという趣旨の歌である。兼家が詠んだ歌の「おしはかる」は誰もが知っている自然の摂理である月の動きを道綱母に対して用いている。つまり明確に「おしはかる」人物が明記されている。

『紫式部日記』三四

こころみに、物語をとりて見れど、見しやうにもおぼえず、あさましく、あはれなりし人の語らひしあたりも、われをいかにおもなく心浅きものと思ひおとすらむと、おしはかるに、それさへいとはづかしくて、えおとづれやらず。

友人は宮仕えに出仕した私を軽蔑しているだろうと推量する場面である。作者である紫式部は日記中で自身に対して友人が思っていることに対して憶測をする形で「おしはかる」を用いている。

この二つの日記に共通していることは、どちらも「推し量る」を投げかける人と、投げかけられる人が明確に存在していることである。『蜻蛉日記』では兼家が道綱母に「おしはかる」ように言葉をかけ、『紫式部日記』では作者が友人の心境を「おしはかる」とし、詳しい状況や心情の描写は見られない。

また『枕草子』でも同じような表現がある。

『枕草子』一三七

童に教へられし事などを啓すれば、いみじう笑はせたまひて、「さる事ぞある。あまりあなづる古ごとなどは、さもありぬべし」など仰せらるるついでに、「なぞなぞ合せしける、方人にはあらで、さやうの事にりやうりやうじかりけるが、『左の一はおのれいはむ。さ思ひたまへ』などたのむるに、さりともわろき事は言ひ出でじかしと、たのもしくうれしうて、皆人々作り出だし、選り定むるに、『そのことばをただまかせてのこしたまへ。さ申してはよもくちをしくはあらじ』と言ふ。げにとおしはかるに、日いと近くなりぬ。

清少納言が中宮定子と話をしている時、中宮の発言に対し心中で納得する場面である。この「げにとおしはかるに」の頭注には「なるほど、『くちをしうはあらじ』とおしはかる。」とある。先に挙げた二つの日記と同様、「推し量る」事柄がどのようなものかは明記されていないが、誰が何を推し量ったのか明確である。この推し量る人物が明確な点は『讃岐典侍日記』と違っていると指摘できるだろう。

その他「推し量るべし」の表出が見られた平安時代の作品と本文は次の四作品に十通りみられた。

『源氏物語』若菜下　二八

院も、ただ、いま一たび目を見あはせたまへ、いとあへなく限りなりつらんほどをだにえ見ずなりにけることの悔しく悲しきを、と思しまどへるさま、とまりたまふべきにもあらぬを見たてまつる心地ども、ただ推しはかるべし。

紫の上が危篤になり、光源氏が動転している姿を見る人々の心地を「推し量るべし」としている。作者が光源氏を見て

いた人々の心境を読者に推察するよう書かれている。
この場面の注には「語り手の、容易に推測できるとする言辞」とある。周囲が光源氏をどのように見ているか、読み手が共感できる場面なので省筆したとみられる。

『源氏物語』宿木　四五

かく女々しくねぢけて、まねびなすこそいとほしけれ、しかわろびかたほならん人を、帝のとりわき切に近づけて、陛びたまふべきにもあらじものを、まことしき方ざまの御心おきてなどこそば、めやすくものしたまひけめとぞ推しはかるべき。

作者は薫の人柄を否定的に表現している。しかし薫が帝から受けている待遇から、薫の本来の姿は他の場面で見られたようなものとは違うのだろうと推察する場面である。本当の薫はどのような人間性を持っているのか、帝からの扱いを考慮すると推察できると、読み手に薫の真の人柄を想像させるため省筆したと思われる。

『栄華物語』巻一　五八

二月ついたちに女御参りたまふ。そのほどの有様おしはかるべし。帝、いとかひありて、時めかせたまふほどに、いつしかとただにもあらぬ御気色にてものしたまふぞ、いとどゆゆしく、父大納言胸つぶれて思されける。御祈りをつくしたまふ。帝もいとうれしきことに思しめしたり。三月になりぬれば、事のよし奏して出でさせたまふほど、いみじくめでたし。

女御入内に対しての様子に対して「おしはかるべし」としている。またその後の父大納言や帝の様子から、とてもよい儀式になったであろうことが分かるという内容である。儀式の様子については周知の事実である上、その後の登場人物達からの賞賛を踏まえるとよい儀式だったことは想像に難くないため省筆したと思われる。

『栄華物語』巻十二　三四

御果てまで御念仏仕うまつるべく、そこらのどもによろづを掟てさせたまふ。いみじくきびしきやうに忌ませたまへど、上の御前おはしませば、大将殿をはじめ、さるべき殿ばら皆仕うまつらせたまへば、すべてえ忌みあへぬさまに、おどろおどろしき御よそひ、心ざしのほどおしはかるべし。

藤原穆子の葬送における人々の装いと穆子の供養に対して「おしはかるべし」と用いられている。葬送という儀式がどのようなものか周知されている上、藤原穆子が有名な人物であったことから詳細に述べずとも葬送の様子がわかるだろうとして省筆したとみられる。

『栄華物語』巻十六　三四

かくてこの御時に、春日の行幸まだしかりつれば、この十月にせさせたまふ。大宮も思しめすやうありて、一つ御輿にておはします。宮の女房の車、内の女房の車など合せて二十余ぞある。その有様おしはかるべし

彰子が春日社へ行幸する時の様子に対して「おしはかるべし」とされている。彰子が藤原道長の娘であることから行幸の詳細を述べずとも華やかなものであったという前提が考えられる。車の数だけでも彰子の行幸がどれだけ華やかな様子であったか読者は推察できるとし、作者は省筆したのだろう。

『栄華物語』巻十七　一四

御供に二十余、三十に足らぬほどの僧ども、かたちきよげに丈等しく美々しきを、十二十人続きたちたり。このなりども、さまざまいみじくつきづきしくして、蘭沓どもを履きたり。色々の蛎幅どもをひらめかし使ひたるけはひ有様、いみじくつきづきしく見えたり。また十余ばかりの小法師ばらの、いとをかしげなるが色うるはしく愛敬づきたる、二三人具して、すゑ筥、草座などいふ物ども持たり。また男童のつくりたてたるやうなる三四人具したり。おのおのかく引き具して参りこみたり。中大童子さまざまの装束どもしてととのへたり。一人の御供かうやうなり、おのおの集まりたるほどおしはかるべし。

法成寺金堂落成供養の場面である。僧達がさまざまな物を手にして集まっている様子を「おしはかるべし」としている。藤原道長が中心となり催した会なので詳細を書かずとも豪華な会であったことは想像に難くない。また各道具や僧の顔立ちにも筆が向けられていることから、作者はこの賑わいについて読者に想像を任せたと考えられる。

『栄華物語』巻十七　一六

行道終りて、左方は五大堂の南の廂に着き、右方は阿弥陀堂の東の廂に着きぬ。その次々は例の作法の事ども、おしはかるべし。

法成寺金堂落成供養の行道が終わった後、人々が作法に従い行動した場面で「おしはかるべし」としている。行道が終わった後の作法は一般的に広く知られているものだったので、作者は省筆したと思われる。本文には「例の作法」ともあるので、このような場面でどのような手順が用いられるのかは書かずともわかるという常識が前提となっている。

『栄華物語』巻二十四　五

かくて参りこみ集まるほどに、御前の方思ひまゐらせ奥ゆかしげなり。参りこみぬれば、寝殿の御階の間に、御几帳うるはしく立てさせたまひて、その西の間より、

渡殿より、また西の対、東南面まで、一間に二人づつゐたり。御階の東の方より東ざまに折れて、水の上の渡殿までゐたり。数は知らず、おしはかるべし。

皇太后妍子が大饗を開くとき、女房たちが宮の元へ参内したその数について「おしはかるべし」としている。直前に「数は知らず」とあることから、参内した女房の人数は分からないので、その直前までの様相から人数を推察するよう読者へ向けられたものであると考えられる。以下私見だが、人数が数え切れないほど多いことを表現するための省筆ともとれよう。

『栄華物語』巻二六　一七

西は大宮よりさしすぎ、東は京極をきはに続きたちたるを、またおはしましつる法興院までぞ、名残は続きたるほどをおしはかるべし。

尚侍嬉子の葬送に関して、葬喪所までの行列が甚だしいものであったことに対して「おしはかるべし」とされている。実際の道の名前を用いることにより行列の程度がどのようなものであったかを記述していることから、嬉子の葬送を悲しむひとが大勢いたことに対しても推量の意が含まれていると考えられる。

『栄華物語』巻二九　一二一

さて御車に乗せたてまつりてかき出すほど、この御声ども、推しはかるべし。一品宮、東の廊の板敷下ろしておはしますべきなれば、さしあひていみじ。乳母たち、え参らず。宮の御声え忍びあへさせたまはず。

妍子の葬送について、車に棺をのせて引き出されるときの周囲の声に対して「推しはかるべし」としている。つまり周囲の声が悲しみを持っていることや、「宮の御声え忍びあへさせたまはず」とあるように人目を憚らず泣く様子を推察するよう読者へ促したと考えられる。

『栄華物語』巻二九　一二七

仏はこの造らせたまへる阿弥陀の三尊、御経のほど推しはかるべし。講師などの申しつづけたまふ有様、なかなかなる物まねびなれば書かず。

藤原道長が行った妍子の四十九日の法事についての場面である。その時の三尊仏と経のすばらしさについて「推しはかるべし」が用いられている。後述に「なかなかなる物まねびなれば書かず」ともあることから、そのすばらしさについては詳しく語りがたいものであったため省筆したと考えられる。また、省筆することでかえってそのすばらしさが言葉で表せないものであるとの表現とも取ることができる。

『栄華物語』巻三〇　一四

七日になりぬれば、つとめてよりいそぎせさせたまふ。

例の事ども推し量るべし。

藤原道長の葬送の場面である。その葬送についての作法は一般的に広く知られているものだったので、作者は省筆したと思われる。後の本文でも「さるべき人々、例の装束の上にあやしの物ども着て」や『「よろづ事削ぎて、ただ形のやうに」と仰せられけれど、事かぎりありて』と決まり事形式に則っている様子が窺える。

『栄華物語』巻四〇　一

女房の車、殿の御方に三つ、宮の御方に三つ、さまざまの花紅葉、色々を織りつくして、日ごとに替へさせたまふ。すずしの衣に綿を入れたる日もあり。なかに、薄様、もみぢ葉、櫨、また紅にて裏は色色なるも着、菊は蘇芳菊、ただ推しはかるべし。

関白殿（師実）が北の方と天王寺に参詣する時、女房達の装束に関して「推しはかるべし」としている。具体的にどのような衣装を着たのか、材質や色に関して名があがっていることから、詳細は述べずとも分かるとし省筆したと思われる。

『狭衣物語』巻四　二八〇

殿の御賀茂詣で近うなりぬれば、舞人にさされたる殿上の若君達など、心ことに思ひ急ぎたり。大将殿には、ありし御夢のことなど、上ぞくはしう語りたまひける。げに、さしもたしかに御覧じけんよ。しづめがたき心の中をおぼしも咎めで、強ひて憂き世にあらせまほしう思すらん神の御心ありがたきものからかたがたにつらき方にぞすすみたまひける。

参らせたまふ日の事どもなど推し量るべし。いつ、いかなりし御願ども果させたまふにかと、御社の神人どもも驚くに

大将（殿）が賀茂詣に立つ日の行列に対して「推し量るべし」とされている。後の記述には禰宜たちも驚くほどの願ほどきを用意したことから、賀茂詣の準備が周到にされていた事がうかがえる。また舞人になった若君達が特別な気構えをもって準備していることからも、この行列の程度が甚だしいものであったと推察できる。

『今とりかへばや物語』巻四　四五

年ごろ儲けの君おはしまさぬに、夜昼念じたてまつり多くの神仏に祈り申したまへるしるしに冲おりけん、かく思ひなくきらきらしきあたりにしも出でおはしましぬることを、凱も誰もめづらしき御幸ひに思ひおどろきたてまつる。御産屋のほどのこと、言はずとも推し量るべし。三日の夜大殿、五日春宮の太夫、七日内裏より、九

日大将殿など、心々にいどみ尽くし心を尽くして仕うまつりたまへる、いとめでたし。

左大臣家の今尚侍が帝にとってはじめての男皇子を出産した。その産養の様子に対して作者は「推し量るべし」としており、頭注には「省筆の草子地」とある。祝い事の様子が盛大かつ豪華であったことが推測されよう。よって産養がどのようなものであったかは、詳細に書かずとも分かるだろうと読者に想像を任せた省筆と考えられる。

先に挙げた『蜻蛉日記』『枕草子』は特定の相手とのやりとりの中で「推し量る」が用いられており、何を推し量るのかが明確だった。また、『紫式部日記』の例は作者が友人の心を推察するという意味で使用されている。

一方、物語ははじめから読者を想定して書かれているものである。今回は会話や和歌での表現は見られなかったため、『源氏物語』や『栄華物語』などの「推し量るべし」はすべて書き手から読者に対して用いられていると考えられる。

つまり「推し量るべし」は相手がいることを前提として用いられている言葉となる。

これらの推し量るべしは、次のように分類できる。

1、礼儀作法や手順など周知の事柄に対しての省筆。

2、状況や様子から推測・推察が出来る事に対しての省筆。

〜のほど、その有様、こころざしのほど「推し量るべし」の形である。

3、身分の上下がはっきりしている場合、本人やとりまく周囲の状況・様子がひどく（すばらしい・ひどい）時に用いられる。豪華絢爛で盛大だった場合、その華やかさをいちいち書くのではなく、読み手の想像に託し、物語を盛り上げる効果がある。

物語に「推し量るべし」が多く見られたのは、詳細を書いてしまうことで説明的文章となり、物語の質や話の雰囲気を壊してしまうという作者の意図があったのではなかろうか。全てを事細かに述べないことにより、読み手は自身が想像した世界観で物語を読み進めることができる。よって読み手がより物語を深く味わえる効果を狙ったとも考えられるだろう。つまり物語の書き手は物語の執筆時から読み手を想定していた上、物語が不特定多数の眼に触れるものであるとの想定もなされていたことであろう。

宮崎荘平氏は、「読者を意識しているかにみられるこれらの表現は、特に読者を意識してなされたものではなく、物語文学などによって培われたところの作者の文学的嗜好とでもいうべきもののあらわれとみられる。[注八]」としている。

林水福氏は、「宮崎荘平氏が、「思ひやるべし」、「おしはかるべし」などの表現を、省筆上の一つの技法とみて、つぎのような異見を出していることも無視しがたい。」としながらも、「宮崎氏の言う物語文学とは、主に『栄華物語』を指す

のである。しかし、たとえ『栄華物語』からの影響があるとしても、それを直ちに対読者意識の有無の問題に結びつけるのは短絡に過ぎはしないか。」とし、『土佐日記』や『蜻蛉日記』にも読者に呼びかける例があるとし、同じジャンルからの影響という見解を示している。(注九)

林氏の指摘通り、『讃岐典侍日記』も他の日記文学同様、読み手を意識した手法として省筆が取り入れられている。ただ、省筆という手法が他作品からの影響によってなされたとの断言は難しいところである。長子が他作品を読んでその手法を参考にしたかどうか明確ではないからだ。他作品を宮中などで目にする機会はあっただろうが、『讃岐典侍日記』を書く際にその手法を用いたとの確信はしがたいだろう。「推し量るべし」は同じ日記というジャンルからだけではなく、先ほど挙げた複数の物語に見られたことから、長子は日記中に読み手を意識した記述をしていたと考えられるだろう。

四、読み手として選ばれた常陸殿

『讃岐典侍日記』の「推し量るべし」は読者に対して用いられている表現であるとしたが、日記の読者について、長子は下巻に次のようなことを記している。

下巻四十四節（日時不明）

「わが同じ心に偲びまゐらせむ人と、これをもろともに見ばや」と思ひまはすに、偲びまゐらせぬ人は誰かはある。されど、われをあひ思はざらむ人に見せたらば、世にわづらはしく洩れ聞こえむも由なし。また、あひ思ひたらむ人も、方人などなからむ人は、映えなき心地すれば、「この三廉に合ひたらむ人もがな」と思ふに、「常陸殿ばかりぞ、この三廉に合ひたる人はあなれ」と思ひ、迎へたれば、思ふも著く、あはれに心安く渡られたり。日暮らしに語らひ暮らして。

これは現存している日記の一番最後の記事となる。日付の叙述もなく、詳細な時期は不明である。長子は書き記した日記を共有する人物の条件として、①堀河帝をともに追慕する人②私をよく思わない人に見せたら、世間で悪評になるのはよくないので、そのようにならない人③味方が多い人、とした。その条件に合致する人物として、常陸殿を挙げ、この日記を共に読んだとしている。

この長子が挙げた三つの条件について中村氏は次のような見解を述べている。

讃岐典侍が「堀河院を偲ぶ人」と「偲ばない人」とを区別していることが見て取れる。ポーズである可能性もあるが、この作品は堀河院を共に追慕する気持ちのある人間にしか読まれるべきではないという前提がある。そして一緒に作品を読みたい人物となると、さらにバイアスがかかる。跋文の内容は、読者を限定しようとする作品の性格を如実に語る。また、作品の性格が、波線部e

「常に仰せられ、きこえさせたまひし」こと、つまり堀河院と讃岐典侍との「対話」にあることも明示されている。[注七]

中村氏は、長子が『讃岐典侍日記』を見せる人物を選別したことにより偏りが出たと指摘している。本文には長子が『讃岐典侍日記』の読者条件として「三簾」に当てはまる人物とした。つまり初めからこの日記は不特定多数の人間に見て欲しくないという長子の気持ちが現れている。

二節で指摘したことと重ねて、周知の事実に対して詳細を叙述しないのは、始めからその事柄を詳細に書かずとも「推し量ることが出来る」読者層を限定していたからだ。あえて「三簾」という条件を設けることでこの日記の読者が堀河帝に対して共通理解があった人物であるとし、悪評が立つのを避けたからではなかろうか。

『讃岐典侍日記』のなかには常陸殿が出てくる場面がもう一つある。

下巻二十七節（天仁元年六月）

六月になりぬ。暑さ所狭きにも、先づ、こぞのこの頃は、事もなく、御心地よげに遊ばせ給ひて、堀川の泉、人々、「見む」とありしを、何とおぼしめししにか、あながちにすすめつかはししかば、「おぼしめしごとなれば、先づ明日」とて、われは出でて、人たち待ちしに、二車ばかり乗り連れて、日ぐらし遊びて帰りしに、「われは、今宵とまりて、心やすき所にてうち休まむ」と思ひて、とどまりしを、常陸殿といふ女房、「あなゆゆし。ただ参らせ給へ。『扇引きなど人々にさせむ』などありし。御扇どもまうけて、待ちゐさせ給ふに」とあれば、この人たちに具して参りぬ。待ちつけて、泉の有様、うちうちに問ひなどして、「扇引き、今宵は。さは」と仰せられしかば、「明けむが心もとなきに、『今宵』と思ふに、人たちのけしきの暗くて見えざらむこそ、口惜しくさぶらへ」と申ししかば、つとめて、「明くるや遅き」と始めさせ給ひて、人たち召し据えて、大弐三位殿を始めて、ゐ合はれたりしに、「先づ引け」と仰せられしかば、引きしに、「美し」と見しを引き当てで、中に悪かりしを引き当てたりしを、上に投げ置きしかば、「かかるやうある」とて、笑はせ給ひたりしことを、但馬殿といふ人の、「家の子の心なるや。異人はえせじ」など、興じ合はれしに、その折は何ともおぼえざりしことさへ、「いかでさはしまゐらせけるにか」と、なめげに、けふは、ありがたくおぼゆる。

この場面は堀川の泉で過ごした長子が一晩泊まっていこうとしたところ、常陸殿から堀河帝が扇引きをするので待っていると告げられる。長子は宮中に戻って参加するが、引いた扇がよくない物だったので投げやってしまう。それを但馬殿という女房が普通の人は出来ない行動だと発言する。

この常陸殿について守屋氏は次のような見解を示している。

多くの女房の中にあって、これだけの口吻をもって長子に相対することができたというのは、両者の関係が他の女房関係に倍して親密なるものであったことを物語る。両者がそれほどに親昵であったのは、同じ内侍として親しく帝に近侍したこと、年齢が比較的近似していたであろうこと、母を異にしていたにしても、姉が乳母として帝に奉仕していたこと、などのいくつかの共通項が内因していたこともたしかであろうが、なんといってもデスポティックな白河院の為政下にあって、帝王としての自立性を志向する堀河帝の苦渋に満ちた心情をよく理解し得ていたというところに、最たる要因を見るべきだろう。(注十一)

下巻二十七節（天仁元年六月）からもわかるように常陸殿は泊まっていこうとした長子に対して、堀河帝が扇引きをするからといって宮中に呼び戻した人である。守屋氏の指摘に沿えば、常陸殿は堀河帝が長子に参加してほしいという望みを察することができるほど、堀河帝に対しての理解が深かったとなる。同時に、堀河帝に愛される長子を肯定的に捉えていると考えてよいだろう。このような理由から、長子は日記の読み手として自分を愛してくれている堀河帝をよく理解し、また愛されている自分を肯定的に捉えている常陸殿を日記の読者に選んだといえる。

常陸殿と長子は出仕し始めた時期に違いはあるが、二人の役職が同じだったことから、立場が近似していたことが分かる。しかし守屋氏の指摘のように、このことが日記を見せる要因の一つとなったとは断定できない。ただし、他の女房たちよりも近しい存在になりえた可能性があり、互いの理解が深かったかもしれないという背景は考えうるだろう。

常陸殿とされている人は長子と共に堀河帝に仕えていた女房で、藤原家房女房子のことである。常陸殿は房子の父家房の任地が常陸だったためそのように呼ばれたのだろう。『中右記』によれば、常陸殿が宮中へ出仕したのは寛治八年四月五日条である。「又典内侍除目、典侍藤原房子、故常陸守家房朝臣女也、」となっている。また嘉保二年正月一日条では「陪膳典侍藤房子、常陸、」となっていることから、このころには常陸殿と呼ばれるようになっていた事が窺える。長子が出仕したのは康和四年正月一日条「今朝供御薬、陪膳新内侍藤原長子、顕綱女也、夜前任内侍、」(注十二)なので、常陸殿は長子の先輩にあたることになる。

互いに出仕年は離れているが、この二人は始めに就いた役職も近似している上、自身が八年仕えた人に十五年間仕えた常陸殿は、悲しみの共有だけではなく、堀河帝を取り巻くいろいろなことに関して理解が深かったのだろう。

『讃岐典侍日記』は『今鏡』『本朝書籍目録』『八雲御抄』『徒然草』に作品名や本文と類似するものが載っている。『徒然草』の百八十一段には次のようにある。

『徒然草』には、『讃岐典侍日記』の本文と類似している描写がある。

「『ふれふれこゆき、たんばのこゆき』というふ事、米春きふるひたるに似たれば、粉雪といふ。『たまれ粉雪』と言ふべきを、あやまりて、『たんばの』とは言ふなり。『垣や木の股に』と謡ふべし」と、ある物知り申しき。昔より言いける事にや。鳥羽院幼くおはしまして、雪の降るに、かく仰せられけるよし、讃岐典侍が日記に書きたり。(注十三)

これに対し、『讃岐典侍日記』の本文は次のようになっている。

つとめて起きて見れば、雪、いみじく降りたり。今もうち散る。御前を見れば、別に違ひたることなき心地して、おはしますらむ有様、異事に思ひなされてゐたる程に、「降れ、降れ、粉雪」と、いはけなき御気はひにて仰せらるる、聞こゆる。

二つの本文を比べると、『讃岐典侍日記』にはない記述が『徒然草』に書かれていることが分かる。書かれている内容が全く同じでないことから、『徒然草』が『讃岐典侍日記』を読みそのまま本文を書き写してはいないことになる。しかし『讃岐典侍日記』の読み手が常陸殿だけにとどまらず、他者の目にも触れていたであろうことは考えられる。それは今日まで『讃岐典侍日記』が現存していることを踏まえると、日記が不特定多数の眼に触れており、読み継がれていることとも言える。

今井源衛氏は、『讃岐典侍日記』について「世間への公表を前提として書かれたもの」とし、その上で「常陸殿」の記述については書きあげてからともに読もうとしたのであり、執筆時に読者を明確に想定していたとはしていないとしている。(注十四)

五、まとめ

『讃岐典侍日記』における「推し量るべし」はさまざまな先行研究において「推し量って欲しい」と希望・願望の意味をもった解釈がなされてきていた。その場の出来事や心情を詳細に述べずとも理解して欲しいという長子の心情を汲んでの解釈が続けられてきたからである。本稿の考察で扱った『讃岐典侍日記』にみられる三例の「推し量るべし」について、①は周知の事実についてを省筆していた。しかし、②・③の本文のように長子のその場面での心情に対して用いられた「推し量るべし」は堀河帝や自身に対して理解や共通認識がある人物なら適切に推察できるという意味を持たせたものであった。

「推し量るべし」は他作品において、ものごとを推量・推察する相手を意識した言葉であった。つまり初めから推量させる側と、推量する側がはっきりと提示されている形で書か

れていた。よって『讃岐典侍日記』に見られる「推し量るべし」も同様に相手を意識しての言葉であるとした。そして推量させる側の人物が明確化されていないことから、読み手に投げかける表現と捉えられるとし、読者意識のある表現だという結論に至った。しかしその表現は物語のように初めから不特定多数の読者に向けたものとは異なっている。

長子が『讃岐典侍日記』の読者として「常陸殿」を選定したのは、常陸殿が堀河帝や長子に対しての深い理解を持っていたからとの理由が考えられた。長子が日記の読者を「三簾」と決めたのは、日記中に書かれた各場面の詳細を鮮明に回想できる者だけで記憶の共有をするためだろう。常陸殿はこの回想が行える人物として読者に選定されたとなる。一方でこの「三簾」という条件提示には『讃岐典侍日記』が多くの人の眼に触れてしまう可能性を考え、あえて条件を提示することで自己防衛による牽制の意味も含まれていたのではとの見方も考えられる。

日記という、現在では秘匿性のあるものが読者を想定し、また言及したことは興味深い。今後も日記の読者意識についてさらなる研究を進めたい。

※『蜻蛉日記』『紫式部日記』『枕草子』『源氏物語』『狭衣物語』『栄華物語』『今とりかへばや物語』の本文はすべて小学館『新編日本古典文学全集』に拠る。なお、巻数と段落番号も本文に拠って附した。

[注]

(注一) 玉井幸助『讃岐典侍日記通釈』(育英書院　昭和十一年)

(注二) 中野幸一「日記文学—読者意識と享受層」(季刊『文学・語学』第五十二号　三省堂　昭和四十四年)

(注三) 青木生子「宮廷女性のこころ　読者意識」(『国文学　解釈と鑑賞』三月号　至文堂　昭和四十一年)

(注四) 今井卓爾『讃岐典侍日記　注釈と評論』(早稲田大学出版部　昭和六十一年)

(注五) 『讃岐典侍日記』の本文は全て小谷野純一『校注讃岐典侍日記』(新典社　平成九年)に拠る。なお、日付は本文から推定されるものを私につけた。

(注六) 注三参照

(注七) 『日本国語大辞典』(小学館　昭和四十七年)

(注八) 宮崎荘平『平安女流日記の研究』(笠間叢書　昭和五十二年)

(注九) 林水福「『讃岐典侍日記』の対読者意識」(『日本語日本文学』十巻　昭和五十八年十二月)

(注十) 中村成里氏「『讃岐典侍日記』下巻成立期再考—末尾追記と常陸殿—」(『文藝と批評』第十巻三号　平成十八年)

(注十一) 守屋省吾「日記の被見者『常陸殿』」(新典社研究叢書八『平安後期日記文学論—更級日記・讃岐典侍日記—』新典社　昭和五十八年五月)

(注十二) 史料大成『中右記』(臨川書店　昭和四十年)

(注十三) 神田秀夫ほか校注・訳新編日本古典文学全集四四『方丈記　徒然草　正法眼蔵随聞記　歎異抄』(小学館

平成三年）

（注十四）今井源衛「讃岐典侍日記――平安女流日記研究の問題点とその整理」（『国文学：解釈と鑑賞』二十六巻二月至文堂　昭和三十六年）

［附記］

本稿は平成二十七年十二月十二日（土）に行われた「東アジア比較文化国際会議院生部会発表会」（於 大東文化大学）において発表した原稿に加筆修正したものである。ご教示くださった方々に厚く御礼申し上げます。